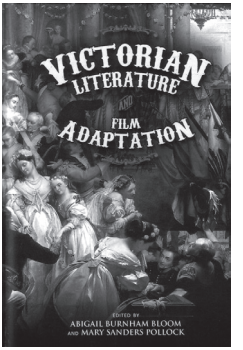
書　評



Abigail Burnham Bloom and Mary Sanders Pollock, eds., *Victorian Literature and Film Adaptation* (Amherst, N.Y.: Cambria Press, 2011)

坂口　美知子

1980 年代の女子大で、当時、開放された（されたい？）優秀な女子が目指した「アメリカ文化」でなく、やや地味で選択する人数も少なかった「イギリス文化」を専攻して卒業後一般企業に就職し、1980 ～ 90 年代に、一部の「イギリス好き」の中で起こっていた「英国伝統映画」(heritage film) への熱狂を在野で経験した。意気揚々とロンドンに到着後、「リバティ・プリントのブラウスをロンドンの一般的な若者は着ていない…」ということに初めて気づくという痛い経験も懐かしいほどの昔の話である。『アナザー・カントリー』(1984)、『眺めのいい部屋』(1986)、『モーリス』(1992) などといった一連の「英国伝統映画」は、イギリス本国以外の世界各国で「典型的なイギリス映画」として受け入れられ、主にヴィクトリア朝、エドワード朝の上流階級、中上流階級を描いて、一般的な「イギリスらしさ」のステレオタイプの強化に成功し、またその「熱狂」が逆輸入されたように本国でもそれら映画の撮影地やナショナル・トラスト所有の歴史的建造物を巡る類の観光も増えつつあった。その後入学した大学院では、それら、セリフも暗記しているほど精通してしまっていた作品について語ることはとても憚られ、ある作家の作品を取り上げる時には、「映画化されていないもの」を選択するのがお約束であるかのようであった。留学したイギリスの大学院でも、英国伝統映画として人口に膾炙している作品について取り上げると、軽いが深い侮蔑を感じずにはいられず、敢えてそういった作品を取り上げる際にはより高度に洗練された切り口による研究が要求されていたように（僻みかもしれないが）思う。

本書は、私のような浅学の者がこういった大きなタイトルの論文集に期

待する入門書的な包括性や取っ付き易さに真っ向から対抗していると思われる。「各理論に基づく映画化のテクニックは？」「小説の映画化について学ぶ学生に喚起すべきことは？」といった高尚なテーマでがっちり武装して新参者をがっかりさせ、身の程を知らしめるために書かれたのかも知れないと思われる節があり、それは僻みっぽい私だけの感想ではないようである。

本書は、Thomas Leitch による参考文献等を含んで 23 ページにもわたるイントロダクションによって始まるが、この論文集の他の書評者の一人である Kamilla Eliot も指摘するように、Leitch はそれぞれの論文を、イントロダクションにおいては珍しいことであるが、「要約するだけでなく評価」し、内容の紹介というよりは論評することで、本書を「予想される本書への批判から擁護している」と思われる。その「予想される批判」とは、作品をあえて年代別に並べていない「革新的」な章立て、「ヴィクトリア朝文学」の定義、扱う作家の偏り、といったものに対してであろう。しかし、残念なことにその周到な「擁護」が仇となって読者にバイアスを与え、興味のままに各章の論展開を味わう楽しみは事前に奪われてしまう。また、Eliot も指摘するように、全 11 章のうちの 2 章を担当する筆者が２人もおり、またヴィクトリア朝期の作品で最も映画化されることが多い作家の一人であるディケンズには１つの章が与えられているのみであるのに、あまり映画化されることのないトロロープと、厳密にはヴィクトリア朝作家とは言いにくいオースティンにそれぞれ 2 章ずつが割り当てられている。このことは、本書が網羅的な内容を期待される大きな題目を掲げていることを考えると、Leitch の献身的積極的な擁護も説得力を欠いており、一つ一つの論文は力作ながら、期待とは裏腹の不安定で満たされない読後感を残す。

以下に本書の章立てと、章ごとの要旨を示してみたい。

第 1 部は、‘Reinterpreting the Victorians: Adaptation and the Techne of Revision’ として、Thomas Leitch の Jekyll, Hyde, Jekyll, Hyde, Jekyll Hyde, Jekyll, Hyde: Four Models of Intertextuality、Jean-Marie Lecomte の The Poetics of Silent Film in Lubitsch’s *Lady Windermere’s Fan*、Natalie Neill の Adapting Dickens’s *A Christmas Carol* で構成されている。特に第 2 章の

The Poetic of Silent Film in Lubitsch's *Lady Windermere's Fan* では、オスカー・ワイルドの風刺喜劇の一つ、*Lady Windermere's Fan* を扱い、ワイルド劇の真髄である言語的機知と対話を 1925 年に「サイレント映画」に移し替え、大ヒット作品とした Lubitsch 監督の見事な方法・テクニックをシーン単位で丹念に見ていく。サイレントに語らせるテクニックの大変秀逸な分析ではあるが、ワイルド作品のアダプテーションとしてまず思い浮かべるものではないという違和感は残る。しかし、Leitch のイントロダクションによれば、映画の歴史のごく初期、サイレント映画の時代には、使用されるヴィクトリア朝文学は極めて限られていたそうである。2012 年現在で The Internet Movie Database にあるサイレント映画に関して、ディケンズ 79 本（うち *Oliver Twist* 14 本）、ジョージ・エリオット 16 本（うち *Silas Marner* 6 本）、*Vanity Fair* 4 本を含むサッカレー作品の映画化 7 本、ハーディ 4 本、メレディス 1 本となっており、全体としては、1902 年から 1925 年の間に単独で 16 回も映画化された *East Lynne* と 75 回映画化されたコナン・ドイルの『シャーロック・ホームズ』の比ではない。音声がつく映画となってまた映画化しやすさの基準が広がり、アダプテーションにふさわしいヴィクトリア朝文学の新たな「聖典」が生まれてきたそうである。

第 2 部　は、'Modifying the Victorians: Adaptation and Shifts in Cultural Values' として 5 つの章が挙げられている。第 4 章はアトム・エゴヤン監督による 1997 年制作の *The Sweet Hereafter* の出典を 1842 年ロバート・ブラウニングの *The Pied Piper of Hamelin; A Child's Story* の詩に求めて論じ、第 5 章は、F. R. リーヴィスがジョセフ・コンラッドの最悪の作品だと評した *The Return* (1897)　を 2005 年にパトリス・シャロー監督が映画化した *Gabrielle* を用い、第 6 章の Michael Eberle-Sinatra はジェーン・オースティンの *Emma* が原作とされる 1995 年制作の米コメディ映画 *Clueless* で *Emma* の勘違いの求婚者 Frank Churchill をモデルにした登場人物がゲイとして描かれていたことから遡って、原典である Emma における Frank Churchill のセクシャリティを読み解こうとするなど、その次々に展開される 'Modifying' がなんとなく居心地の悪く感じられるのは何故であろうか。また第 1 部と第 2 部をこのように仕分けした意図については Eliot も

指摘するようにそれぞれの章の題目にある ‘Reinterpreting’ と ‘Modifying’ や ‘shifts in cultural values’ が相互補完的な意味合いを持つことから、決して明確とは言えないと思われる。

第 3 部 ‘Translating the Victorians: Teaching Books by Reading Movies’ は実際に映画作品を使ってヴィクトリア朝文学またはその映画化について教えるときのティーチャーズ・マニュアルともなるであろう。英文学に馴染みの少ない学生を相手とするとき、（または自分自身に対しても時々…）Teaching Books by ‘Showing Movies’ を行っている身としては、その気まずさ、罪悪感、無力感をやや和らげてくれ、新たな展望を与えてくれる内容となっていた。第 9 章では Bram Stoker の *Dracula* (1897) を 1919 年制作のドイツ映画 *The Cabinet of Dr. Caligari* から 2002 年のガイ・マッデン監督のものまで 6 本の映画化作品を扱って原典の持つ多様性を探求する教授法を示し、第 10 章では Sherlock Holmes を扱ってこのアイコン的な主人公が時間・空間・ジャンルを超えて変容する様を解説している。第 11 章では、再びオースティンの *Persuasion* (1816) を、1995 年ロジャー・ミッチェル監督のアダプテーションを使用しての教授法を扱っている。英語のネイティブ・スピーカーであっても、小説の表現法の一つとしてのオースティンの「詳細なリアリズム」に翻弄されるという点にホッとする思いがした。この第 3 部全体については英語が第一言語でなく、当該地の一般的な文化的知識についてもやや不安のある学生への教授法としてもそう大幅な改変をしなくても、大いに適用可能であるように思われる。

Leitch も指摘するように、文学作品の映画化という研究分野の先行研究には必ずといっていいほど、コンラッドが自らの小説の目的を語った有名な一節、‘My task which I am trying to achieve is, by the powers of the written word, to make you hear, to make you feel—it is, before all, to make to see’ と、アメリカ映画草創期の監督 D. W. Griffith の ‘The task I am trying to achieve is above all to make you see.’ が引用される。そして 2 つのメディアに共通する、読者及び視聴者に想像の世界を「見せる」責務の相似性を皮切りに、文学作品と映画という 2 つのメディアの根本的違いについて述べ、言語的な刺激から喚起された概念的イメージは最終的には非言語的刺激からのものと区別がつかない、という締め括りから原典のもつオリジナリティ

のみが優遇されるべきではないという話の流れとなっていく。個人的には、見方を拘束されることなく、あれこれ勝手にコメント出来るお気軽なミーハー気質も残してヴィクトリア朝文学の映画化を楽しみたいと思う。